大学院・学校教育専攻、漢文教材の分析と鑑賞Ⅱ

史伝教材「鴻門の会」に対する考え方について

国語教育専修・太田亨

１、授業の概観

大学院・学校教育専攻の授業「漢文教材の分析と鑑賞Ⅱ」において、教育現場から来られた３名の学生が受講した。

本授業の目的は、教科書に取り上げられている教材の概要とその特徴を理解し、実際に読解できるようにすること、その上で、教材の内容を他者に対して伝えることができるようにすることが目的である。その教材として漢詩と史伝を用意していたが、受講生が長編の史伝について理解を深めたいとのことであったので、史伝、特に『史記』における項羽と劉邦を取り扱った。

上記の目的を達するために、学生には次に挙げる三つの到達目標を課した。

①漢文教育の意義と教材の概要を理解する。
②日本と中国の辞書を使いこなし、丁寧に読み解き、作者の真意を理解できる。
③作品のポイントを理解し、作品内容を的確に他者に伝えることができる。
④中国文学と日本における受容に関心を持つ。

まずは、『史記』の概略と、作者・司馬遷の製作意図を解説し、なぜ膨大な『史記』が誕生したかを明らかにした。作者の意図を理解したところで、それが作品にどのように表れているのか、その代表として項羽と劉邦を取り扱った。

項羽と劉邦に関する資料については、こちらが訓読文の資料を用意して配布し、適宜不明な点を考察・解説していくという形をとった。その際には、プリントに現代語訳を附し、解説後にはビデオを見ることによっていっそう理解を深めた。

上記のように授業を進めていくに当たって、授業外時間の学習課題を出した。授業で出てきた問題について、なるべく中国文献資料の中からその答えを見つけるようにした。また教育現場から来られた先生であるため、授業における生徒の反応を簡単なレポートにまとめてもらい、次の授業で報告させるようにした。

話の展開の中で重要な箇所を取り上げて行くに当たって、項羽と劉邦の全てを取り扱うことは困難である。教材として必ず取り上げられる「鴻門の会」までの話を取り扱った。

２、学生アンケート及び結果

授業後、アンケートを行った。これから、アンケートの質問事項とその結果を示す。

まずは授業の概要について、６項目のアンケートを行った。以下、その項目と結果である。回答者は３名である。アンケート用紙には、マイナス要素を含む選択肢も当然あるが、０名の場合は省略した。

①、シラバスの説明（授業の概要）はありましたか。（あった：３名）
②、授業における教員の態度（熱意や言動や学生に対する対応等）は適切でしたか。（大変適切だった：３名　）
③、授業には興味を持って臨むことができましたか。（臨むことができた：３名）
④、教員の説明はよく分かりましたか。（よく分かった：３名）
⑤、授業配付資料・ビデオ等の使い方は効果的でしたか。（非常に効果的だった：３名）
⑥、『史記』（項羽と劉邦）について、あなたが考えたこと･思ったことを自由に書いてください。（これまでの授業での経験を踏まえた上での感想でも、作品の内容自体の感想でも何でも構いません。）＊一部を抜粋

・高校では必ず教える教材なので、大変有り難かったです。「鴻門の会」に入るときには、いつもそこまでの話の流れをどう伝えるかと言うことに苦心していましたが、今回の授業で背景がよく分かったので、再度資料を作り直したいと考えています。また百聞は一見に如かずだと思うので、中国の映像資料も活用したいと思います。具体的には、授業で「鴻門の会」について考えさせた後で、自分の想像した世界と比較させる目的で使用したいと考えています。さらに言語活動を行う際には、生徒に考えさせたい問いを具体的に示すことが重要であることも学びました。そのためには、教師の深い教材研究が必要であることも改めて認識したので、教材文だけでなく、その内容に関連する部分も含めて読んでいきたいと思います。教材研究の仕方を学んだ一年間でした。

・司馬遷が史記で「天道の是非」を問うたところが一番印象的であり、作者の人生のことも考えると、それを主題としたということが切なかったです。これまでに一部分しか読んだことがありませんでしたが、この授業で様々な場面について読んでみて、歴史書としてだけでなく、文字としても

純粋に面白いことに気付きました。人物について書かれている文を読む機会が多かったので、これが紀伝体で書かれていることなのだと実感することができて良かったです。また、司馬遷の項羽や劉邦に対する評価なども書かれていて興味深かったです。他の授業でも古典を学ぶ意義について考える機会がたくさんあったのですが、史記の歴史的・文学的価値や日本との関わりと影響について知ることができ、漢文を学ぶ意義について改めて考えるきっかけになりました。項羽と劉邦は読んでいて楽しかったですが、幸せになってほしいと思った人物がことごとく無常な最後を迎えてしまうのが残念です。

・『史記』の講義を受けて、これまで自分がいかに浅い授業を展開してきたかを思い知らされました。司馬遷が『史記』を人物ごとにとらえ、まとめていることに、作品自体が卓越した深みを持つことの源泉があるように感じます。司馬遷の透徹した人物眼によって深く描かれた各人物像が、時間軸の上で交差し、読者であるわたしたちの想像力の中で、生き生き生命力を得るという作品の構造自体を授業で生かし切れたらなと考えます。そういった読み方ができて、始めて本当の意味で『史記』を読むと言うことが実現できるのではないかとも考えます。高等学校国語科に与えられた物理的な授業時間数の中ではどうしても限界があるかもしれませんが、教材として取り扱う本文を精選してでも、人物像をとらえた上で、それらを交差させていくような『史記』の授業に取り組んでみたいと思います。「中国古典をわたしたちの価値観の典型ととらえ、後代文化の源泉となるもの」という受容と、「中国古典をわたしたちの現在をとらえ、新しい価値観を紡いでいくもの」という考え方とが、同時に実現される授業を模索したいと思っています。まずは、自分自身の作品理解を深めていくことが第一歩だとは感じています。自分の国語教育観の再構築を迫られる講義でした。

３アンケート結果について

①～⑤の結果より、教員の対応や授業の進行については、あまり不満は見られなかったと言える。３名の授業に取り組む姿勢であるが、みな積極的に授業の内容理解に取り組んでいる姿勢が見られた。今回、院生の授業では、始めてビデオを多く利用したが、教材理解を深めるきっかけとなり、有効的な手段であると感じた。

『史記』の内容自体に感銘を受けた学生もいれば、教材としての『史記』を考えさせられた学生もおり、それぞれに異なる効果があったと思われる。

学生が様々な点でものの見方・考え方に感銘を受けたのも、授業外時間において、様々な点で中国の日本に及ぼした影響に気づいたからだと思われる。他の授業との兼ね合いもあるので、多くの課題は出せないが、漢文をより深く意識させる課題をこれからも出したいと思う。

まとめ

『史記』は高等学校の教科書に必ず採用されている。小説的な要素を含み、生徒が将来に覚えているか否かは教員の指導の影響によるところが大きい。昨今作品内容から離れて国語教育を行うことがしばしば見られる。それが教員の予習不足に原因がある場合は非常に残念である。教員自身が教材を深く理解し、幅広い視野から生徒を指導することが望まれる。今後も他の教材において、学生の作品理解を深めさせたいと考えている。